

第20回 西の池学園

ふれあいまつり



ステージ前にぎわい



フィナーレを飾る花火



旭神楽団の舞台



司会がんばりました!

今回初めて西の池ふれあいまつりのボランティアとして参加しました。私の配属は鮎の塩焼きでしたが、経験豊富なボランティアの方に塩の付け方や焼き加減を教えてもらいながら炭火で鮎を焼きました。西の池学園の利用者の方や職員の方、そして地域の方や子どもたちが楽しむ雰囲気の中で、忙しくも楽しい時間を過ごすことができました。また抽選会の景品の豪華さにもびっくりしました。来年は何か当たる事を楽しみにしています。ボランティア（小谷小 PTA 会長）
角本 久利様



みなさん楽しんでます!



ありがとうございます。地域への感謝を込めた「ふれあいまつり」

利用者さんと地域の方々が触れ合い、相互理解を深めることを目的としたふれあいまつり。今年で節目の20回目を迎えました。

20年前の第1回は地域の方々と交流する機会も少なく、社会全体として障害に対する理解が現在のように進んでない時代だったこともあり、地域の皆様に来ていただけるか不安を胸に準備を始めたそうです。西の池学園の職員数がまだ30名と少ない中で、自分たちでステージを組み立て、テントの設営を若い利用者さんに手伝っていただくなど、準備には大変な苦勞があったようです。当日はボランティアとして小谷女性会を中心にお願ひし、たくさんの地域の方々の協力を得る事が出来ました。そして迎えたふれあいまつり当日。3台の送迎バスを運行したこともあり、たくさんの方々が西の池学園を訪れてくださり、大変盛り上がったそうです。

今年は1,200人程のお客様をお迎えし、大盛況のうちに終えることができました。恒例となっているボランティアの皆様（81名参加）による手伝ひあり、出店も大変賑わっていました。これも地域の皆様方のご理解ご協力の賜物であると、職員一同大変感謝しております。また、熊本地震災害の義援金を寄せて頂いた皆様、17,897円が集まり、8月4日に日本赤十字社に寄付致しました。ご協力ありがとうございました。

これからも、ふれあいまつりをとおして、地域の方々と平成会が触れ合い、より良い関係が築けるよう、そして地域が盛り上がるように「21回目」も頑張っていこうと思います。

ふれあいまつり実行委員長 西部 義員

グループホーム



お盆時期になるとグループホームに入居されている皆さんの中には、お墓参りを希望される方が多くおられます。その際には、私たち支援員が現地まで付き添っています。中には、Bさんのように再開発でお墓の所在地が分からなくなったり、親戚と疎遠になったりと、様々な理由で、年々お墓参りが難しくなりつつあります。

それでも可能な限り利用者の皆さんが、大切な人の供養をするためのお手伝いをしていきたいと思ひます。

グループホーム 松井 茂雄



ずっと墓参りには行ってるよ。昔はお兄ちゃんが迎えて来てくれていたんだよ。この間、そのお兄ちゃんも亡くなってしまったけど、久しぶりに兄弟に会えて良かった。両親の墓参りに行くたびに、気持ちも落ち着く感じがする。自分も死んだらそこに入りたいたいと思ひながら手を合わせているんじゃないけど。

今年、介護タクシーを使って墓参りに行き、初盆じやったけん、実家に寄って仏壇にも参ってきたよ。お兄ちゃんは78歳じやった。

Aさん 63歳 女性

最近、柔道着を着たお父さんの姿をよく思ひ出すんよ。小さい頃、家から道場が見えよって、それを見てた頃を思ふんよ。去年もその前も、親の墓を探しに行つたけど、見つけれなかった。もう一回探しに行つたら、道を変えたら分かる気がするよ。自分が生きてるうちに、見つけられると良いんじゃないけど。【土地再開発により、昔の場所から移転され所在地が分からなくなっている】

Bさん 82歳 男性



デイセンターこだま

「月イチの楽しいドライブ」

デイセンターこだまでは月イチで、利用者と職員と一緒に車に乗って、ドライブに行つてます♪こだまから車に乗って10分ちよつとの公園まで行つて遊ぶのが、定番のコースです。

普段から踊ったりジャンプしたりするのが大好きなSさんは、この公園のブランコも大好きなんです！いざ漕いでみると、もうそれは高いところまで漕ぐので、一周回つてしまふんじゃないか？と思うほど。実に楽しそうなお話ですが、この時つてどんな気持ちなんだろう？

この答えのヒントについて、自ら発達障害を持つ作家・東田直樹さんは、著書でこう述べています。『僕は跳びはねている時、気持ちに空に向かっています。空に吸ひ込まれてしまいたいと思ひが、僕の心を揺さぶるのです。』（東田直樹 2007『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』エスコアール出版部）

Sさんがブランコを楽しそうに漕ぐのも、空に向かって羽ばたいてしまいたいと思ひが表れているのでしょうか？そんなSさんの隣で一緒にブランコを漕ぐ職員も、「懐かしいなあ。なんだか楽しいなあ。」と、一緒に楽しませてもらつてます。

デイセンターこだま 小林 弘幸



空に向かって♪

あおぞら工房

「体験を通して学ぶ」

あおぞら工房には、広島精研工業(株)で「通い箱の整理」という作業があります。施設外で作業するため利用者さんから人気が高く、「私も行って作業したい」と希望されることもしばしばあります。その中には「この作業は難しいかも」と思ふ方もおられますが、例外なく一度は体験して頂きます。

障害のある方に対し、周囲の人が善意で「難しいから私に任せて」と代わりにやつてしまう事があると思ひますが、それは、その人の体験を通して学ぶ貴重な機会を奪っているのかもしれない。実際に作業された利用者の方は、「また作業したい」と言ふ方もいれば、「もう行かない」と言ふ方もおり反応はさまざまです。

作業を体験したことによって、「自分にはできない」とあるいは「自分には難しい」と学んだのだと思ひます。その上で次の取り組みを一緒に考えていきます。あのインシユタインも「何かを学ぶためには、自分で体験する以上にはいい方法はない」と語っています。これからの障害のある方の「体験を通して学ぶ」機会を大切に、成長の芽を育むような支援を続けていきたいと思ひます。

あおぞら工房 内田 孝洋

何かを学ぶためには、自分で体験する以上にはいい方法はない!

